

しんらん同人

お正月に撮った家族写真



No,543

3・4
月号

浄土真宗本願寺派 誓願寺

〒171-0052 東京都豊島区南長崎1-3-8

【電話】03-3950-7828 【ホームページ】<http://www.seiganji-tokyo.jp/>

われもひかりのうちにあり

誓願寺住職 古賀尚之

れる縁にふれることだと感ずるこの頃です。

本願寺新報二月号に掲載の詩に目が留まりました。転載致します。

「撰取不捨」

迷子になった犬は

自分が迷子であることも忘れ

その日の食物を求めるだけの

野良犬になっていた。

ある日 その犬は

自分の名前を呼ぶ声を聞いた。

その瞬間

その犬はもはや野良犬ではなかった。

そして犬は気付いた。

自分の名を呼び続けた御方に

しっかりと抱かれていることに。

(この犬は、実に私のことです。)

寒波と積雪。 厳寒の中での皆既月食と寒さづくめのこの冬も過ぎ、三月！春の訪れです。皆さまいかがお過ごしでしょうか。さて、お寺の居間に、お正月に誓願寺に集まった、長男、長女家族、次女家族の写真があります。その誕生地はというと、満州・福岡（五名）・東京・千葉・鹿児島・富山とさまざままで、今元気で誓願寺に集まっています。人としてこの世に生まれることさえも稀なことと言われている中で、夫婦であったり、親子であったり。縁というものは不思議なものです。そうして生まれたこの私のこの命は何処から来て何処へ行くのか。この身体は老いて朽ち果てるが、いつまでも生き生きとした命の世界があるのではないか。人として生まれた目的は、六道を輪廻する命の世界から抜け出して、お浄土に生ま

「すべておまかせ」

誓願寺初代住職 岡本泰雄（昭和六十一年九月法話）



如来様の御本願を信ずるといふ、そこに安心させていただく、定まる道のをべてあるのが「安心決定抄」であります。最初から最後まで、なぜ本願を信じ、どう安心させてもらうのかということを書いてあるお聖教であります。

第八代御門主の蓮如さまは、安心決定抄を何度も何度も読ませていただくが、その度に有り難い。こんなお聖教は、今までご縁にあつたことがないと非常に称賛してあります。

その中の一部を拝読して、しばらく味あわせていただきたいと思います。

いうまでもなく私どもの教えは浄土真宗の教えであります。本願を信じていることが根本になります、その他はなにもないんです。

信じたから儲かったとか、そういうことを目的とした教えとは違うのであります。

本当に如来様の本願を信じて今日を生かさせていただく。安心したいのちを終わらせていただけると、そういう人間のいよいよよぎりの問題の解決をさせていただくのが浄土真宗の教えであります。

そういう意味から申ししても、実は真宗の教えというのは非常にやさしい、これ以上やさしい教えはないのですが、一面から考えると非常にむづかしい。

なぜむづかしいかというと、こちらのはからいが全然用事がない

ものですから、どうしようかと思っている自分の気持ちにあわないのであります。

信心しなさい、そうしたらこういふふうには儲かりますとか、信心しなさいそうしたらこういふ幸せがありますよ、といわれると、それじゃあ儲かるために信心しようという気持ちになるのであります。

真宗の教えは信じたらこうなりますよという教えではありません。それではどういふ教えであるかという、聞くより他に、如来の御本願を聞かせていただいて安心させていただくより他に、生きる道はない、ということを知らしてもらうのが真宗の教えであります。



人間には必ず最後の時があります。

元氣な時には、ああしようこうしようと考えますが、例えば、私のように思いもかけない肺がんにかかり、宣告されますと、いよいよお別れということになってきますと力になるものは何もないのですね。できるだけ健康でありたい、それができるあいだはまだいいんですけれどもね。

やがて終りの時が来るのじゃないかと思えますけれども、しかしながら、いつどうなってもいいんだと、どこでどうなるうとも、今日を通して生かし、そしてやがては安養の浄土に参らせずにはおかないという如来様の願の中に抱かれているんだということを味あわせてもらうときに、どちらになってもよろしいという気持ちと申しまますかね。本当にこのみ法に遇わせていただきましたからこそ、この幸せの心を頂戴したのだなと思うと、ありがたいなあ、と味あわせていただくことが出来るわけです。

まだお金で解決できるとか、何かをもってくれば始末がつけられるといった問題ならいいんですけども、何をもってきてても解決のつかないもの、これが後生の一大事です。まだ生きておる、生きられるというときは、後生の一大事なんていえないかもしれないかもしれません。

もう年齢もかなりになってきた、この人生もこれで終わりになるんだなという頃になってきますと、安心して今日を生きることができらるだろうかということを考えざるを得なくなりそうです。

だから、昔からこの問題については、本当に自分が年をとってみると味わいがわかるといった人がありますけれども、若い頃はなかなか考えられないですね。かなりの年齢に成ってくると周囲の人の状況から見ても、あんなに元気だった人が逝ってしまったのかと思います。

誓願寺にお参りになっていた方もだいぶ亡くなっておられます。そんなことに遇ってみますと、よく自分は生きているなとつくづく思いますね。やがては自分の上に来ることは間違いないでしょうけれども、いまだ人ごとという感じがぬけないのであります。

でもつぎからつぎに往かれる人があると、それに遇うたびに今度は自分の番かなと思わさせていただくのも、あるいは、うかうかしではだめだぞと、せかさされているのではないかという気持ちもするんです。

そういうご縁にあわせていただいて、何によって自分の不安とか、心配とかが解決できるかというところ、如来の御本願を信ずるといって、これ一つなんです。これがいわゆる後生の一大事でありま

私達はみんなこの人生を本当に寂しいことであっても、さよならしていかなきゃならん時がやがて来るわけでありまして。

そうしますと、安心して生きる・安心して死んでいけるということとは、いつ、どこでどうなってもよろしいという気持ちで生きることに、本当に安心して生きられる事でしょう。どうなるんかなあ、先のことはさっぱりわからないなあ、という不安があったら、今日が不安になるのです。明日が不安なのではなく、今日が不安心配なのです。だから後生の一大事が解決して、親様の如来様のおはからい一つよと、お慈悲にまかせて安心しきって生きるということ、本当にいま生きていられるということではないでしょうか。

これは何をもってきてても解決のつけようもない、本願を信ずるといって、如来様のおはからいに任せるというほかにないのです。そういう根本の問題、人間の究極の問題をときほぐして、どうすれば如来様の御本願を信ずることができるとかということ、こまごまと、お説きくださってあるのが「安心決定抄」であります。

安心決定抄の中に「念仏の行者、名号を聞かば、あはやわが往生は成就しにけり。十方衆生往生成就せずば、正覚取らじと誓ひたまひし、法蔵菩薩の正覚の果名なるが故にと思ふべし」

南無阿弥陀仏という名号を聞かせてもらったらず救うぞ、まちがわさんぞというお誓いが出来上がったのが南無阿弥陀仏の名号でありますから、この名号を聞いたなら、あはやわが往生は成就しにけり、この名号の上に私の往生がもう解決されておったのだな、こう頂戴すべきであると。



それから「信心決定せん人は身も南無阿弥陀仏、こころも南無阿弥陀仏と思うべきなり」

南無阿弥陀仏をいただいた人は、身体も心もみんな南無阿弥陀仏にまるめられてしまっておるんだ、こう味わっていかねばなりません。

今日詳しく頂こうというのは次のご文であります。「仏心というは大慈悲これなり」「仏心は吾等を愍念したまうこと骨髓に徹りて染みつきたまへり」 仏さまの心というのは、私どもを憐れんで下さって、そしてかわいそうだなあ、なんとかして救わずにはおkanzというその心が、私の骨髓までしみとおって下さるのです。

「例えば火の炭におこりつきたるがごとし」 ちようど、例えていうならば、火を起こして炭に火がついているようだ。「離たんとするとも、離るべからず」 いったん炭に火がつくと、その火を捨てようとしても捨てることは出来ないようなものです。



「摂取の心光我等を照らして身より髓に徹る」 摂取不捨、如来様のお慈悲の心、摂取の光が我等を照らして下さって、身より髓に至るまで通ってくださるのである。だから、「三毒煩惱の心までも仏の功德の染付かぬ所はない」自分の心を思ってみたら、欲と腹立ちと愚痴、そういう心が燃えたっているのが私の心であります。骨の中にまで飛び込んできて、離れたまわれないのが如来様のお慈悲の心であります。

「仏心というのは大慈悲これなり」 仏様の心というのは何か特別なものがあるような気がしてみたり、それをどうすれば自分の心に

ただけるかと思うてみたりしますが、そんなものじゃないんですね。慈悲心が大きいという意味は、絶対という意味です。

はかることの出来ない大きなものを「大」というのです。如来様のお慈悲というはかりしれないお慈悲なのに、こういうふうに思ったら救ってもらえるのじゃないか、守ってもらえるのではないかと、自分の思いで仏様の心を押しはかたりする場合があります。

そんなものは役に立たないのであります。お慈悲は絶対である。どうだから、こうだからではなくて、どうしても私を離さんと抱きつづけて下さるお慈悲が如来のお慈悲であるということを「仏心は大慈悲これなり」といっておられる。これは有名な観無量寿経の中にある言葉であります。



今日お参りの方々の中には多くのお母さん方がいらっしやいます。お子さまのことを思われるときに、愛情がどんなものであるかなど考えることなどないと思います。子供については、なにもかもなげうって愛さずにはおれないのが、お母さまの心ではないでしょうか。

人から笑われるようなことでも、この子のためにはせずにおれないのが母親ではないかと思えますね。普段は頭のいいはっきりしたちゃんとした人だけれども、子供に関しては本当に馬鹿みたいになつていて姿を見ることがありますね。あれが母親の心でしょうね。他のことは身づくろいをして自分を綺麗にみせるけれども、子供に関しては何もかもなげうってその子を愛さずにはおれない、これが母親の心というべきではないかと思えます。可愛がらずにはお

れない、愛さずにはおれない、これが親心ですね。この気持ちを思っていただと如来様のお慈悲が少しでも分かっていただけじゃないでしょうか。



仏心というのは大慈悲である。絶対の慈悲である。量ることが出来来ない、どれほど私のことを思って下さっているかわからないということですね。ですから如来の心はこの私の身体にまで来て下さって骨の髄までもしみとおって下さるのであります。



お聖教をいただいてみると如来様のお慈悲が骨髓、骨のしんまでしみついて下さる。他人の事ではありませんよ。お互いみんな一人一人そうなんです。今、そうしていらっしやるそのまんま、如来のお慈悲はその骨髓に通っていてくださる。離そうとしても離れることは出来ない。捨てようとしても捨てられない。それはちょうど炭に火がおこっているようなもので、火がついてしまったらどうすることも出来ない。そういうように如来の大慈悲が私の身体にしみついて下さるんだ。そういう働きをしてくださるのが、大慈悲心であります。



絶対なる如来のお慈悲が私の上に働いてくださると頂戴させていただきますと、どうしようか、こうしようかは用事がなくなりますがね。向こうから一生懸命になって私を包んでいて下さるのですか

ら、それにおまかせして、抱かれておることを味わいながら今日を生かしていただくよりほかにないと思えます。

「安心決定抄」はそのようなことがずっと書いてあるのです。それも親心から察して、子供を思わずにはおれない、子供が願ったから、お願いしたからではなく、子供を捨てることが出来ないというその心が親心であるように、如来様のお慈悲はこちらからお願いたから救って下さるような、そんなお慈悲ではなくて、向こうから私を離さんぞと包みとって下さるのであります。そういただく、本当に、どうしようこうしようではなかった、常に如来のおはからいの中にあつたということを喜ばしていただくよりほかにないわけでありませう。

だから実際のことになってきますと、ただひたすらに念仏申して、南無阿弥陀仏・南無阿弥陀仏、有難うございますと、思いだしては念仏を申させていただくことでもあります。

み名をとなえる、親のみ名をとなえる、如来様のみ名をとなえる。南無阿弥陀仏、ほんとうにそうだな、私がこうしておるまんま、しみとおってくださるお慈悲であつたか。そうするといつ何時この人生をさよならする時がきても、抱かれたまま行く世界はお浄土よりほかにないわけですから。そこに安心させていただく日常が、念仏者の生活といわれるものであります。



故岡本泰雄はこの法座の半年前に肺ガンの告知を受け、この法座の半年後にお浄土に参りました。来年二月三十三回忌をむかえます。

【ご法座等のご案内】

3月

3・11 (日)

■午前十時 「正信偈について」

定例法座 【森永勝師】

■正午

医療相談 【佐藤公彦医師】

3・18 (日)

■午前十時

なかよしクラブ

(乳幼児から小学生まで)

3・25 (日)

■午後一時 「歎異抄について」

彼岸会・祥月命日合同法要

【高田慈昭師】

4月

4・8 (日)

■午前十時 「正信偈について」

花まつり 【岡本信悟師】

■正午

医療相談 【佐藤公彦医師】

4・15 (日)

■午前十時

なかよしクラブ

(乳幼児から小学生まで)

4・22 (日)

■午後一時 「歎異抄について」

定例法座・祥月命日合同法要

【高田慈昭師】

坊守のひとりごと
誓願寺 坊守 古賀恭子

「ばあば、りっちゃん来たよ」と近くに住んでいる三歳の孫は玄関先で、ニコッと笑顔で挨拶してくれます。小さい時から彼女の笑顔は沢山の人々を笑顔にしてくれました。前住も彼女に会うとニコニコしていました。經典に書かれている、無財の七施（お金や品物を使わなくても出来る布施）のひとつが「和顔」「ほほえみ」であり、「ほほえみはみんな持っている宝物」お寺の掲示板に掲げる言葉でもあります。仏さまの笑顔は、いつでも・どこでも・だれにでも届いています。そう思いつつ、この私はすっかり笑顔で応えているのでしようかと考えさせられるこの頃です。



【孫三歳の七五三にて】

編集後記

・ 二度の積雪に見舞われたこの冬。本堂への階段の除雪中にころんで足を打撲してしまい、数日間痛みが続いた。七十二歳という年齢を改めて認識しました。

・ 三月中旬に、腎臓がん手術後二度目の半年検診があります。特段の自覚症状があるわけではありませんが、しばらくは気をもむ時間が流れます。

・ 一・二月号で「干し柿作りが難しい旨」記載したところ、お寺でも可能だとの指摘がありました、今年の年末は作ってみたいと思います。